



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「～ようにする」の意味特徴：「～ようになる」「～に/くする」との比較から
Author(s)	池上, 素子
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 6, 1-20
Issue Date	2002-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45625
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC006_002.pdf



「～ようにする」の意味特徴

－「～ようになる」「～に／くする」との比較から－

池 上 素 子

要 旨

本稿では、例えば「彼はみんながその機械を使えるようにした」にあるような、変化を表す他動表現「～ようにする」の意味特徴について、対応する自動表現「～ようになる」（「みんながその機械を使えるようになった」等）、および「～に／くする」（「息子を医者にする」「値段を安くする」等）との比較から考察した。

その結果明らかになったことは以下の3点である。1) 「～ようになる」は非状態性の動詞が前接した場合、同一の、または類似した事態の複数回の発生による習慣・繰り返しの定着を表すが、「～ようにする」の場合、必ずしもこれは当てはまらない。2) 「～ようにする」の否定方向への変化を表す形式には「～なくする」と「～ないようにする」の二つがある。前者は直接変化を引き起こすことを表すが、後者はそのような変化が起きよう間接的に条件を整えることを表す。また、「～なくする」は前に修飾部がある場合使いにくいことがある。これに対し、「～ようになる」の場合、否定方向への変化を表す形式「～なくなる」と「～ないようにする」の間に顕著な違いはない。3) 「～に／くする」は現実の現象を表すが、「～ようにする」は、将来そのような事態が起こる可能性を示す（これは「～に／くする」と「～ようになる」にも当てはまる）。

【キーワード】 他動表現、「～ようにする」、「～なくする」、「～ないようにする」、直接的・間接的

1. はじめに

1.1 目的

「なる」は、以下のような構文で状態の変化を表す自動詞である（本稿では、(1)～(3)のように名詞、形容詞が「なる」に前接した句を「～に／く

なる」、(4)のように動詞が「ようになる」に前接した句を「～ようになる」と記す。例文の出典は文末の（ ）内に示す。出典が示されていないものは筆者の作例である）。

- (1) 彼は医者になった。
- (2) 問題が複雑になった。
- (3) 卵が安くなった。
- (4) 彼女はピアノが弾けるようになった。

このような「なる」文に対応する他動表現が以下のようなものである（本稿では、(5)～(7)のように名詞、形容詞が「する」に前接した句を「～に／くする」、(8)のように動詞が「ようにする」に前接した句を「～ようにする」と記す）。

- (5) 彼は息子を医者にした。
- (6) 彼女の存在が問題を複雑にした。
- (7) その店は卵を安くした。
- (8) 母親は彼女がピアノを弾けるようにした。

外国人に対する日本語教育の場では、(1)～(4)と(5)～(8)との関係を、自他の対応として示すのみで、それ以上の異同については、通常、余り触れない。しかし、「～ようになる」と「～ようにする」、および「～に／くなる／する」と「～ようになる／する」の間には意味的な違いがあり、これらの表現が構文的に対応しているからといって、意味的にも等しく対応しているとは言えない。各々の意味特徴を明らかにすることは、日本語学習者の理解を進める一助となると考える。本稿は、このうち「～ようにする」に焦点を当て、「～ようになる」、「～に／くする」と比較することによって、その意味特徴を考察し、記述することを目的としている。

1.2 本稿で対象とする「～ようにする」文

本稿では、変化を表す自動表現「～ようになる」に対応する他動表現としての「～ようにする」を考察の対象とする。本論に入る前に、本稿で対象とする「～ようにする」文について明確にしておく。

「～ようにする」文には、

- (9) 私は1日3 km歩くようにした。

のように、主文の主語と埋め込み文の主語¹⁾が同一であるものと、

- (10) 母親は息子がその部屋に入らないようにした。

のように、主文の主語と埋め込み文の主語が異なるものがある。本稿の考察対象は、後者の、主文と埋め込み文の主語が異なるものである。(9)のような文は、確かに

- a) 私が1日3 km歩くようになった。
b) 私は[私が1日3 km歩く] ようにした。

と、再帰構文的に「～ようになる」文と対応していると言えるが、他動表現の基本が「他に働きかける」ことであると考えれば、b)の文は他動性に乏しく、自動表現に対応する他動表現であるとは言いにくい。また、b)のような文は、自分自身の決意、努力などを表し、変化を表すとは言い難い場合も多い。以上のことから、本稿では

- c) YがZようになる
d) XはYがZようにする

におけるd)のような、主文主語と埋め込み文の主語が異なるものについて考察を行う。

2. 「～ようにする」の意味特徴

2.1 「～ようになる」との比較から

2.1.1 非状態性の動詞が前接した場合

本節では、まず、非状態性の動詞が前接した場合の「～ようにする」の意味特徴について、「～ようになる」の場合と比較し考察する。

「～ようになる」は、状態性の動詞²⁾が前接した場合、一事態の移行を

表し、それ以外の動詞が前接した場合、同一の、または類似した事態の複数回の発生による習慣・繰り返しの定着を表すという特徴がある。例えば、状態性の動詞「食べられる」が前接した

(11) 彼は納豆が食べられるようになった。

は、「食べられない状態」から「食べられる状態」への移行を表すが、(12)のように動作性の動詞「食べる」が前接すると、食べる習慣がついたことを表す。このことは、動作動詞だけでなく(13)のような変化動詞についても当てはまる。

(12) 彼は納豆を食べるようになった。

(13) その薬品を加えることで、セメントがすぐに固まるようになった。

また、「疲れる」、「わかる」等も同様で、

(14) 年のせいか馬鹿に疲れるようになった。

のような文は、通常、習慣・繰り返しの定着と解釈される。「疲れる」、「わかる」等は、状態性と変化性を併せ持つ動詞であると考えられる。その意味で、上の「『～ようになる』は、状態性の動詞が前接した場合、一事態の移行を表し、それ以外の動詞が前接した場合、同一の、または類似した事態の複数回の発生による習慣・繰り返しの定着を表す」という記述は正確でない。厳密に言えば、「非状態性の動詞、および状態性を有するが変化性をも併せ持つ動詞が前接した場合、『～ようになる』は習慣・繰り返しの定着を表す」とすべきであろう。しかし、記述が煩雑になるため、便宜上、ここでは「非状態性の動詞」に、このような類の動詞も含めることとする。

このうち、特に変化動詞、および状態性と変化性を併せ持つと考えられる動詞については、日本語学習者に誤用が多く見られる（以下、明らかに不自然で成立しない文に＊を、不自然さを伴い成立が困難であると判断される文に？を付す）。例えば、

(15)* 1960年から1995年にかけての35年間で、日本人の米の消費量が減るようになった。(1998.5 中国)

(16)* しかし、CMが大ヒットした場合、その商品の売り上げはかなり伸びるとわかるようになった。(2000.5 ロシア)

のように、一回性の出来事であるにもかかわらず、不必要に「ようになる」をつけるケースが多い³⁾⁴⁾。(15)・(16)を一回性の出来事として表すには、「減った」「わかった」とししなければならない。

しかし、「～ようにする」の場合、必ずしも上の特徴は当てはまらない。例えば、

(17) 彼は、会議が1時から始まるようにした。

(18) 太郎は、ドアを開けると黒板消しが落ちるようにした。

(19) シマウマは左右に走り回って、チータが早く疲れるようにした。

(20) A校ではカウンセリングをするなどして、去年1年で不登校児が前の年より10人減るようにした。

のように、「非状態性の動詞＋ようにする」で一回性の出来事を引き起こす場合にも用いることができる。つまり、前接する語が非状態性の動詞の場合、「～ようになる」と「～ようにする」は意味的に必ずしも対応していないということである。したがって、(15)と(20)を見ると分かるように、同じ動詞を使っても、「～ようになる」文では不自然であったものが、「～ようにする」文では、一回性の出来事を表すものとしてかなり許容度が高くなるという場合も出てくる。

このように、非状態性の動詞が前接した場合、「～ようになる」と「～ようにする」では意味に若干の違いが生じることがあり、そのため、一回性の出来事を表す場合、「～ようになる」では前接すると不自然になる動詞も、「～ようにする」では前接し得る場合があることが分かる。

ただし、「非状態性の動詞＋ようにする」は常に一回性の出来事を表し、習慣・繰り返しの定着を表さないかというそうではない。例えば、次のようなものは習慣・繰り返しの定着を図ると解釈される。

(21) 会議が嫌いな太郎は、いつも会議の日と出張が重なるようにした。

② 母親は、太郎が毎日歯を磨くようにした。

庵他（2000）は、

② 油をさして、ドアがスムーズに開くようにした。

④ 私は毎朝朝食を食べるようにした。

という例を挙げ、②の「ようにする」の前に来るのは無意志的な出来事であり、④の「ようにする」の前に来る出来事は意志的なものであるとしている。そして、②のような用法では一回性の出来事を表すのに対し、④のような用法では習慣的な出来事を表すと述べている。しかし、②を見れば明かなように、この場合意志的か否かは関係がない。庵他（2000）に挙げられている②でも、「毎回」のような言葉を文頭に入れば習慣的な出来事と解釈できるのではないか。すなわち、「～ようにする」は、ある事態を引き起こすように図るということが基本義であって、それが同一の、または類似した事態の複数回の発生なのか、一回性の事態なのかは文脈によるのである。

2.1.2 否定方向への変化

次に、否定方向への変化を表す形式について、「～ようになる」と比較して考察する。ここで言う「否定方向への変化」とは、「Xである状態からXでない状態への変化」のことを言う。したがって、「使えるようにならない」「使えるようにしない」のような、「なる」「する」を否定形にしたものは、否定方向への変化を表すのではなく、そもそも変化しないことを表すため、ここでは扱わない。

例えば「見えるようになる」の否定方向への変化を表す形式には、「見えなくなる」と「見えないようになる」の二つがある（本稿では、前者の形を「～なくなる」、後者の形を「～ないようになる」と記す）。一方、例えば「見えるようにする」の否定方向への変化を表す形式には、「見えなくする」と「見えないようにする」が存在する（本稿では、前者の形を「～なくする」、後者の形を「～ないようにする」と記す）。形だけを見れば、両者は対応する形式を持っていると言ってよい。しかし、各々の意味や実際の使用実態は同じであるとは言えない。

意味の違いや実際の使用実態に言及する前に、「～ようになる／する」の否定方向への変化を表す形式について、日本語教育用の文法辞典、教師用指導書等にどのように記述されているか、いくつか見てみよう。

まず、「～ようになる」の否定方向への変化を表す形式について挙げてみる。例えば、庵他（2000）は「否定の場合『なくなる』で表します」と、「～なくなる」のみを挙げている。有馬（1995）も

「Vようになりました」の否定形

- 1) この頃小さい字が読めなくなりました。
- 2) この頃小さい字が読めなくなりました。
- 1) と 2) の両方の形があるが、1) の方が多く使われる。

とし、形としては両者を併記しているが、「～なくなる」を優先的に扱っている。

しかし、庵他（2000）と同じ著者グループによる庵他（2001）は、

（前略）可能な状態から不可能な状態への変化を表す場合、「食べられないようになる」と「食べられなくなる」の二つの形があります。この二つの形は同じ意味です。

例：以前は酒が飲めたけど、手術をしてから {飲めなくなっ
た／飲めなくなった}

と、両者を等しく扱っている。Makino 他（1986）も、

When the verb before *~ yōni naru* is negated, as in KS (B)⁵⁾, this construction can be compared to the *~ naku naru* construction.

[2] a. 林さんは酒を飲まなくなりました。

(*Hayashi-san wa sake o nomanai yōni natta.*) (= KS (B))

b. 林さんは酒を飲まなくなった。

(*Hayashi-san wa sake o nomanaku natta.*)

The *nai yōni natta* version in [2a] implies a more gradual change than the *naku natta* version in [2b]. Thus, adverb such as *kyūni* 'suddenly' or *totsuzen* 'suddenly' can co-occur with [2b] but not with [2a].

と、両者を併記し、その使い方に若干の違いがあることを述べている。一方、グループ・ジャマシイ編著(1998)は、項目としては「Vーないようになる」の方を立て、説明に「『～なくなった』とも言える」と付け加える形を取っており、「～ないようになる」を優先させている。

このように、「～ようになる」の否定方向への変化を表す形式の扱いは一定していない。

次に、「～ようにする」の否定方向への変化を表す形式について、見てみる。

グループ・ジャマシイ編著(1998)には項目として「Vーないようになる」が立てられており、「～なくする」については触れられていない。Makino 他(1986)も、「～ないようにする」を挙げ、「～なくする」に関する記述はない⁶⁾。その他の文法書等には、そもそも「～ようにする」の否定方向への変化を表す形式に関する記述がなかった。

では、両者の否定方向への変化を表す形式として、実際には、どのような形が多く用いられているのであろうか。『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』を検索したところ、「～ようになる」では「～なくなる」が2369回、「～ないようになる」が10回現れていた。一方、「～ようにする」では、「～なくする」が1回、「～ないようにする」が12回出現していた(出現回数には活用形も含む)。また、農学、工学、社会科学という3分野の学術論文を集めたコーパス⁷⁾でも検索したところ、「～ようになる」の場合、「～なくなる」が429回、「～ないようになる」が0回であった。「～ようにする」では「～なくする」が1回、「～ないようにする」が83回現れていた(出現回数には活用形も含む)。

これらのことから、小説という比較的柔かい文章においても、論文という固い専門的な文章においても、「～ようになる」の否定方向への変化を表す形式としては「～なくなる」が、「～ようにする」の否定方向への変化を表す形式としては「～ないようにする」が多く用いられると言える。すなわち、自動表現と、それに対応する他動表現とで、頻繁に用いられる形式が異なるということである。かつ、このことは、一部の文法書等における記述が、(特に「～ようになる」の場合)実際の使用実態を反映していない可能性があることを示唆している。

なぜ、「～ようになる」と「～ようにする」で、頻繁に用いられる否定方向への変化を表す形式が対応していないという事態が生じるのであろう

か。それは、「～なくなる」と「～ないようにする」の間には実質的にはほとんど違いがないが、「～なくする」と「～ないようにする」の間には違いがあること、そしてどちらかというところ「～なくする」の方が使用上制約が多いことによると考えられる。

「～なくする」と「～ないようにする」との違いを考える際には、小出 (1994) が参考になる。これは、使役形との比較等から「～ようにする」の使役性について考察したものである。この中で小出が指摘しているとおり、「～ようにする」は、使役形と違って「直接的に埋め込み文内の関与者に働きかけることはせず、間接的にその事柄を引き起こすことを表す」。これは、例えば、

(25 a) 太郎を部屋に入らせる。

b. 太郎が部屋に入るようにする。(小出 (1994))

と言った場合、(25 a) は、直接太郎に働きかけて (入るように命じて) 「太郎が部屋に入る」という事態を引き起こすことを表すが、(25 b) はそうではなく、例えばおやつを置いておく、鍵を開けておく等、「太郎が部屋に入る」という事態の実現が可能になるような「環境整備」(小出 (1994)) を間接的に行うことを表しているという意味である。

これに対して、(小出 (1994) は触れていないが) 「～に／くする」には「～ようにする」のような「条件整備性」(小出 (1994)) はなく、直接対象を操作し変化させることを表すと考えられる。例えば、

(26) その大学は今年度学生を100人多くした。

とあった場合、(26) は「学生が100人多い」という事態の実現が可能になるような環境整備を間接的に行ったということを意味するのではない。直接「学生が100人多い」という事態を引き起こしたことを表すのである。つまり、(26) は直接的、(25 b) は間接的働きかけであると言えよう (「～に／くする」と「～ようにする」の間には直接的、間接的ということ以外にも違いがあるのだが、それについては後で述べる)。ただし、この場合の「直接的働きかけ」とは、(25 a) のような使役形の場合とはやや異なる。(25 a) の「直接的働きかけ」とは、具体的には太郎に指示すること (または許可

すること)を表し、実際に部屋に入るのは太郎自身の意志的行為である。しかし、「～に／くする」の場合の「直接的働きかけ」とは、実際に主体が対象に作用を及ぼし変化させることを表し、対象自身が行為を行うことを意味しない。すなわち、使役形の「直接的働きかけ」は「対象に直接指示すること」であり、「～に／くする」の「直接的働きかけ」は「対象に直接作用を及ぼすこと」であると言える。

この、「～に／くする」は直接的、「～ようにする」は間接的という特徴を「～なくする」と「～ないようにする」に当てはめると、「～なくする」と「～ないようにする」の違いが見えてくる。例えば、

(27) 彼女は傷を目立たなくした。

(28) 彼女は傷が目立たないようにした。

のような場合、どちらも前接する語は「目立たない」なのだが、「目立たなくする」は「～に／くする」と、「目立たないようにする」は「～ようにする」と同様の性格を持っていると考えれば、(27)は直接傷を目立たない状態にしたことを、(28)は傷が目立たない状態になるよう間接的に条件を整えたことを表していると考えられる。この違いは、(27)・(28)のような、「～なくする」、「～ないようにする」のどちらでも可能な文では明確でない。しかし、次のように、埋め込み文の内容を否定する文を後続させると明らかになる。

(29a) できるだけ中が見えないようにしたが、やはり見えてしまった。

b. ?できるだけ中を見えなくしたが、やはり見えてしまった。

(30a) 支えを作って木が倒れないようにしたが、結局倒れてしまった。

b. ?支えを作って木を倒れなくしたが、結局倒れてしまった。

(31a) 一生懸命雨が池に流れ込まないようにしたが、失敗した。

b. ?一生懸命雨が池に流れ込まなくしたが、失敗した。

(29b)・(30b)・(31b)は(29a)・(30a)・(31a)に比べると不自然である。これは、「～なくした」が直接その事態を引き起こしたことを表すため、後続の文と内容が矛盾するためである。これに対し(29a)・(30a)・(31a)の場合、前件は、そうなるように間接的に条件を整えたことを

表すだけであって、直接その事態を引き起こしたことを表すのではないため、結果的にそれが実現しなくとも矛盾をきたさない。

また、

(32) a. 小人はガリバーが動かないようにした。

b. ?小人はガリバーを動かなくした。

(33) a. 私は息子が部屋から出ないようにした。

b. ?私は息子を部屋から出なくした。

のように、意志的行為に「～なくした」が使いにくいことにも、直接的、間接的という性格の違いが表れている。これは、意志のあるものを直接「動かない」「出ない」状態にするという事態が考えにくいためである。これが、

(34) a. 私は手足を縛って彼が動けないようにした。

b. 私は手足を縛って彼を動けなくした。

(35) a. 彼女は傷を目立たなくした。(再掲)

b. 彼女は傷が目立たないようにした。(再掲)

のように、可能動詞の否定である場合や、働きかける対象がものである場合には、意志性が消えるため不自然ではなくなる。

このように、「～なくする」と「～ないようにする」の間には若干の意味の違いが見られる。これに対し、「～ようになる」の場合、特に間接的に変化することを表すという意味はない。したがって、「～なくなる」と「～ないようにする」の間には、「～ようにする」に見られたような直接的、間接的という違いはない。このため、迂遠な言い方である「～ないようにする」よりも、「～なくなる」の方が優先され、「～なくなる」が多く用いられているのではないだろうか。

「～なくする」と「～ないようにする」には、このような直接的、間接的ということの他に、構文的な違いがある。そしてそのことが、両者の使いやすさ（あるいは使いにくさ）を生んでいる。例えば、

(36) a. 電源を入れた時、トラブルが起きないようにした。

b. ?電源を入れた時、トラブルを起きなくした。

- (37 a. 常に問題が発生しないようにした。
 b. ? 常に問題を発生しなくした。
 (38 a. 水がかかっても聖火が消えないようにした。
 b. ? 水がかかっても聖火を消えなくした。

のような場合、(36 b)・(37 b)・(38 b)は (36 a)・(37 a)・(38 a) に比べて不自然である。これは、(36 a)・(37 a)・(38 a) の場合、修飾部が埋め込み文に係っていると解釈されるが、(36 b)・(37 b)・(38 b) の場合、「～なくした」に係っていると解釈されるためである。つまり、例えば(38)は

- (39 a. [水がかかっても 聖火が消えない] ようにした。(再掲)



- b. [水がかかっても] 聖火を消えなくした。(再掲)



のような係り方をしていると見なせ、(39 b) の場合、あたかも「水に濡れながら聖火を消えなくした (?)」というような内容に解釈されてしまうため不自然になるのである。これは、「～ないようにする」が格助詞「が」を取っているのに対し、「～なくする」は格助詞「を」を取っていることによる。すなわち、(39 a) では「聖火」が埋め込み文中の動詞の主語となっているため独立性が高くなり、修飾部が「消えない」に係るが、(39 b) では「聖火」が「～なくする」の目的語となっているため外の修飾語が「消えなくした」に係るのである。勿論、「～ないようにする」の場合常に「が」を取り、「～なくする」の場合常に「を」を取るとは言い切れない。実際、『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』にも1例だけだが下のような例があった。

- (40) これらは料理と飲み物の話であるが、客としては、キチイとリョーヴィンが来るのだが、ただその組み合わせを目だたないようにするために、従妹と若いシチエルバツキーを呼んであった。

「～なくする」はそもそも事例が少なく、上述の小説および論文コーパスからは「が」を取った文は見つけられなかったが、例えば下のような場合、「犯人が」としても文として成立すると思われる⁸⁾。

41) 検問、自分のいるマスに検問を張り、犯人を通れなくする。

(www.g-rev.com/Online/GuruGuru/DataBase/Police/Skill.html)

しかし、実際には「～ないようにする」は「が」を取る場合が多く、「～なくする」は「を」を取る場合が多いとは言えるだろう。このような違いから、修飾部がある場合、「～なくする」が使いにくいという現象が起きるのである。

このように、「～なくする」の方が、直接的という性格故に意志的行為に用いることができず、かつ修飾部がつくと使いにくいという制約があるため、「～ないようにする」よりも使いにくいという事態を招いていると考えられる。そしてこのために、「～ないようにする」の方が多く用いられているのではないか。

以上のことから、次のような結論が得られる。1) 「～ようになる」の否定方向への変化を表す形式に関しては、「～なくなる」と「～ないようにする」との間にほとんど違いが認められないため、迂遠な言い方である「～ないようにする」がほとんど用いられない。2) これに対し、「～ようにする」の否定方向への変化を表す形式に関しては、「～なくする」と「～ないようにする」との間に違いがあり、かつ「～なくする」の方が使用上制約が多いため「～ないようにする」の方が用いられやすい。

2.2 「～に／くする」との比較から

最後に、「～に／くする」と「～ようにする」の意味的な違いについて述べる。ただし、この違いは「～に／くなる」と「～ようになる」との間にも当てはまることである。つまり、「～に／くなる／する」と「～ようにする／する」との違いであって、「～ようにする」に独自の特徴とは言えないのだが、本稿では「～ようにする」を中心に議論を進めているので、主に「～ようにする」を例に挙げて述べる。

「～に／くする」と「～ようにする」には、前者が現実に行き起きていることを表すのに対し、後者はそのような事態が将来実現する可能性があることを表すという点で違いがある。「～ようにする」が将来実現する可能性があることを表しているという点については、宮島（1994）に指摘がある。宮島（1994）は、辞書での意味記述について取り上げ、多くの辞書では「うごかす：動くようにする」「のばす：伸びるようにする」等と、「～す」で終わる他動詞が「～ようにする」の形で記述されていることに言及し、「～ようにする」は「その変化、動作のアクチュアルな実現を表すのではなく、可能性を表すに過ぎない」が、『～す』でおわる他動詞は、可能性ではなくて、現実とその動的な現象が起こることを表している」ので、このような記述は適当でない、と指摘している。すなわち、『機械を動かした』ことは、機械が現に動いていることを表している。これに対して、『機械が動くようにした』ことは、むしろ、機械の可能性、スイッチを入れれば機械が動き出すようにすること、つまり、機械の調整や修理を表す（宮島（1994））のである。宮島（1994）は、「おなじことは、『動くようになる』という、自動詞的な表現についてもいえる」としている。つまり、「～ようになる」も、実現の可能性を示しているのであって、現実の現象を表しているわけではないということである。

では、「～に／くする」はどうか。

42) 彼は息子を医者にした。（再掲）

43) その大学は今年度学生を100人多くした。（再掲）

42・43はいずれも現実に行き起ころうとしたことを表しており、実現の可能性を意味するものではない。このように、「～に／くする」は現実の現象を表す⁹⁾。このことは「～に／くなる」にも当てはまる。

小出（1994）は、「～ようにする」は、「選択的にその事態が選ばれていることを求める」としており、その根拠として、

44a. 荷物を片付けて、通路を広くする。

b. *荷物を片付けて、通路が広いようにする。

45a. 空気を入れて、風船を大きくする。

b. *空気を入れて、風船が大きいようにする。

という例を挙げている。すなわち、(44 b)・(45 b) が非文になるのは、「広い」「大きい」が相対的なもので、二者択一的選択にならないからであるというのである。しかし、これは、上に述べた、前接する語が名詞、形容詞である場合と、動詞である場合の意味の違いを無視した見解であると考ええる。(44 a)・(45 a) では、荷物を片付けることによって、通路は直ちに広くなるのであり、空気を入れることによって、風船は直ちに大きくなるのである。もしこれを「ようにする」を用いれば、荷物を片付けることによって、「通路が広い」、空気を入れることによって、「風船が大きい」という事態が、将来において実現するように図ったという意味になってしまい、意味的に成り立たない。このように、名詞、形容詞は状態を表す語なので、動詞と異なり時制とは無関係であり、将来ある事態が実現するという文脈にはなりにくい。もし将来その状態が実現するということを表すとすれば、46のように状態として表すよりも、47のように、「なる」を入れて、変化の結果状態が実現するという言い方をする方が自然であろう。

(46) ?タイマーを掛けて、30分後に風船が大きいようにした。

(47) タイマーを掛けて、30分後に風船が大きくなるようにした。

Makino 他 (1986) の「～ようにする」の項目に、

When an Adj (*i/na*) or N is used before *yōni suru*, the verb *naru* is used as follows:

(i) Adj (*i*) stem くなる ように する

ku naru yōni suru

(ii) {Adj (*na*) stem / N} になる ように する

ni naru yōni suru

と記されていることも、状態として記述するより、変化結果として表現する方が自然であることを示唆している。

よって、名詞、形容詞が前接した場合に「～ようにする」が用いられにくいのは上のような事情によると考えられる。小出 (1994) の言う「選択

性」は、動詞が一般に肯定か否定かで二者択一的であることから、結果的にはそうであるかもしれないが、選択的でないから (44 b)・(45 b) が不自然なのだという主張には問題があるように思う。

3. 終わりに

以上、本稿では「～ようにする」の意味特徴について、「～ようになる」「～に／くする」の場合との比較という観点から考察してきた。本稿で述べてきたことを今一度まとめると以下ようになる。

- 1) 「～ようになる」は非状態性の動詞が前接した場合、同一の、または類似した事態の複数回の発生による習慣・繰り返しの定着を表すが、「～ようにする」の場合、必ずしもこれは当てはまらない。
- 2) 「～ようにする」の否定方向への変化を表す形式には「～なくする」と「～ないようにする」の二つがある。前者は直接事態を引き起こすことを表すが、後者は間接的に条件を整えることを表すという点で、両者には違いがある。このため、「～なくする」は意志的行為には使いにくい。また、「～なくする」は前に修飾部がある場合使いにくいことがある。この二つの理由から、「～ようにする」の否定方向への変化を表す表現としては、「～なくする」より「～ないようにする」の方が多く用いられると考えられる。これに対し、「～ようになる」の場合、「～なくなる」と「～ないようにする」の間に顕著な違いがないため、多くの場合、より単純な言い方である「～なくなる」が用いられると考えられる。
- 3) 「～に／くする」は現実の現象を表すが、「～ようにする」は、将来そのような事態が起こる可能性を示す（これは「～に／くなる」と「～ようになる」の間にも該当することである）。

このように、「～ようにする」は自動表現「～ようになる」に対応する他動表現であるが、意味的にも等しく対応しているとは言えないこと、また「～に／くする」との間にも、意味的な違いが存在することが明らかになった。このことは、日本語教育の場において学習者に指導する際、単純に形の上での対応関係のみを示すことは、学習者の誤解を招く恐れがあることを示すものである。

今回は「～ようにする」を中心に考察してきた。「～ようになる」に関する問題、例えば Makino 他 (1986) にあった、「～ないようにする」は漸進的な変化を表し、「～なくなる」は急激な変化を表すという指摘が妥

当であるか否かなどについての考察は今後の課題である。

注：

- 1) 本稿では、「私は[私が1日3 km歩く]ようにした」と分析した時の外側の「私は～ようにする」を主文、内側の[私が1日3 km歩く]を埋め込み文と呼ぶ。
- 2) この場合「状態性の動詞」とは、可能(できる、読める等)・存在(存在する等)・所有(所有する、持つ等)・必要(要る、要する等)・関係(所属する等)等の、いわゆる状態動詞、知覚・思考動詞(痛む、思う、考える等)、属性動詞(山岡(1999/2000)による。役立つ、目立つ、好む等)、および「住む、勤める、仕える」のような「長期にわたって持続する動きを表す動詞」(川口他(1991))等である。
- 3) (15)・(16)は、北海道大学留学生センターにおいて、筆者が担当する文章表現の授業の中で実際にあった学習者の誤用である。()内の数字はその文が書かれた年月、国名はその文を書いた学習者の国籍である。学習者はいずれも中級レベルである。
- 4) (16)は、データから(学習者が)わかったことを記述した文であり、その意味においては成立しないと判断されるため*を付した。これがもし、CMの製作者が、経験の結果、CMが大ヒットした場合は売り上げが伸びるということが徐々にわかってきたという文脈であれば、もう少し許容度が上がるであろう。
- 5) KS(B)とは、同書の「ようになる」の項目の冒頭に挙げられているキーセンテンス(B)のことであり、[2 a]「林さんは酒を飲まないようになった」という文と同じである。
- 6) Makino 他(1986)は、否定表現として「小川は山本が勉強できるように(は)しなかった」という文を挙げている。しかし、前述したように、これは意味が異なるため、ここでは言及しない。
- 7) 筆者は池上(2002)において、「なる」、「する」、「化(する)」とその前後に現れる語との種々の共起関係について、内省と論文コーパスから考察した。本稿で検索に用いた論文コーパスは、これを利用したものである。使用したコーパスについては参考資料をご覧頂きたい。
- 8) 「～なくする」は出現事例が少ないため、Web上でいくつか検索した。(41)はそこで検出された、個人のホームページにあった例である。

9) 43の「多くした」は「増やした」と入れ替え可能である。「増やす」は宮島(1994)が挙げている「動かす」「伸ばす」と同タイプ他動詞である。つまり、「可能性ではなくて、現実とその動的な現象が起こること」を表す。「多くした」が「増やした」と入れ替え可能であるということは、すなわち前者が現実の現象を表すことを示している。

参考文献：

- 有馬俊子(1995)『続・日本語の教え方の秘訣 上』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 池上素子(2002)『日本語における変化表現の共起関係ー「～なる」「～する」「～化(する)」を対象にー』(北海道大学大学院文学研究科言語学専攻博士論文)
- 川口義一・小宮千鶴子・新屋映子・熊井浩子・守屋三千代(1991)『日本語を教える2 日本語教育チェックブック ポイントをおさえる教え方』バベル・プレス
- グループ・ジャマシイ編著(1998)『教師と学習者のための 日本語文型辞典』くろしお出版
- 小出慶一(1994)「ヨウニスル形の使役性」『群馬県立女子大学紀要 国文学国語学篇』15号 pp.129-140
- Makino, Seiichi and Tsutsui, Michio (1986)『A DICTIONARY OF BASIC JAPANESE GRAMMAR 日本語基本文法辞典』The Japan Times
- 宮島達夫(1994)『語彙論研究』むぎ書房
- 山岡政紀(1999)「属性動詞の語彙と文法的特徴」『国語学』197
- (2000)『日本語研究叢書13 日本語の述語と文機能』くろしお出版

参考資料：

- 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』
- 農林水産研究情報センターネットワークライブラリシステム研究報告デー

データベース 論文全文60本 (3.81MB)

(<https://rev.cc.affrc.go.jp/cgi-bin/browse2>)

法政大学大原社会問題研究所 O I S R . O R G

大原デジタルライブラリー 社会・労働問題関連学術論文 E-text リンク集に収集されている社会科学の論文全文99本 (4.42MB)

(<http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/sp/etextlink.html>)

北陸先端科学技術大学院大学学位論文データベース 修士・博士論文 全文 105本 (6.38MB)

(http://www.jaist.ac.jp/library/thesisdb_html/index.html)

The semantic features of “*～ yooni suru*” – compared with “*～ yooni naru*”, “*～ ni / ku suru*” –

IKEGAMI, Motoko

This article discusses the semantic features of “*～ yooni suru*” (as in “*Kare wa minna ga sono kikai wo tsukaeru yooni shita.*”) compared with “*～ yooni naru*” (as in “*Minna ga sono kikai wo tsukaeru yooni natta.*”) and “*～ ni / ku suru*” (as in “*Kare wa musuko wo isha ni shita.*”, “*Nedan wo yasuku shita.*”).

The findings are as follows :

- 1) When a dynamic verb precedes “*～ yooni naru*” or “*～ yooni suru*”, the former construction expresses an habitual act, but the latter construction does not necessarily.
- 2) Both “*～ naku suru*” and “*～ nai yooni suru*” can be used for negating “*～ yooni suru*” construction. The former indicates that someone changes something straightforwardly, but the latter indicates that someone causes indirectly some change to take place. Because of this difference, it is difficult to use a volitional verb before “*～ naku suru*”. Besides, some modifiers are difficult to be used before “*～ naku suru*”. Thus, “*～ nai yooni suru*” is used more often than “*～ naku suru*”. On the contrary, “*～ naku naru*”, one of two negative forms of “*～ yooni naru*”, is used more often than the other (that is, “*～ nai yooni naru*”). It seems that “*～ naku naru*” is preferred to roundabout “*～ nai yooni naru*” because there is no clear difference between the two.
- 3) While “*～ ni / ku suru*” expresses actual changes, “*～ yooni suru*” shows that it is possible for some change to take place. This feature applies to “*～ ni / ku naru*” and “*～ yooni naru*”.